



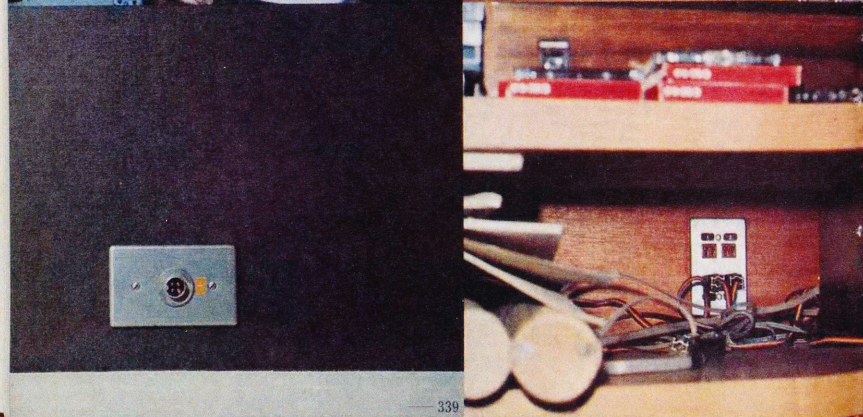
連載

音楽と音と再生装置と……

②柴田南雄氏を訪ねて

4チャンネルの結果が最も発露される現代音楽

若林駿介





「音楽と音と再生装置と……」の第二回、今回は柴田南雄先生宅で。本誌では現代曲の演奏を担当していただけるので、読者の皆さんにもおなじみの方であるが、音楽界では、現役の作曲家として押されたい第一者である（本誌連載「日本の作曲家たち」47年2月号参照）。今回の訪問は、作曲活動をしながらレコード評を担当していただける、氏の音との生活というポイントに焦点を絞っていろいろとお伺いしてみた。

リスニング・ルームは、神宮球場に近い大きな神宮外苑の森に隣接するマンションの一室。一室といっても、二室をぶちぬいた、20畳もあろうかというたつぷりとした空間にかこまれた仕事場というべきところである。装置はトリオの製品でかためられ、ブレイヤーは同社のPS350、総合アンプのKR5080、スピーカーはKL5060を二基、それにカートリッジにシユアV-15 II、オーブンデッキはティアックの4010S、またごく最近カセット・デッキとしてテクニクスのRS275DUという組み合わせで構成されている。

4チャンネルは目下物色中で、規格の統一待ちとか。音はかなり大きな音量で聴かれているようであるが、室も広いので大変落ついた音が出ており、また、まとまりも非常によいものである。

太陽のキラキラと照りつける真夏のひるさき、軽井沢の現代音楽祭から帰京なごたばかりの柴田南雄先生の仕事場のマッシュンをお訪ねしたが、玄関を入ると、まず資料・テープ・レコードなどの見大な資料に圧倒される。室へ入ると、作曲家として欠くことのできない大きなランド・ピアノが目にとまるが、このピアノ・ピアノがあまり大きく感じないところからみると、氏のリスニング・ルームもかなり広いものであることがわかる。

現代音楽という、電子音楽とか電気音響システムを用いた作品が多く、従って現代の作曲家の中にはオーディオに強い人達も多いが、早速まず氏のオーディオ歴からお伺いします。

柴田 はい、は中学生くらいからはオーディオをいじくっていたのです。もちろん真実時代でしたけど。

柴田 え、そうですね。ですから高等学校のとき、運動会なんついでに徹夜で半田付けしてね。昔の281といつかしら、大きな整流管ね。それに240のプッシュアップとか。

年代にすると第二次大戦の前になりますね。

柴田 ちょうど昭和の一桁から二桁への移り変わりの頃です。当時は短波放送などもよく聴きました。

ふつとすると、当時のレコードは最初から電気音響を使っていた、いわゆる電音響のお聴きになったことになりませんか。



柴田 え、ですからはい、たとえばクレタゼとかなんつとか。高橋はきいていますが、当時のいわゆる高級な機械式の音響器は知らないんです。

柴田 はい、これは、当時としては、いわゆる電気音楽をキリに変換して再生するという、電音響を使われた先駆者ということになりますね。

柴田 そうですね。とにかく当時は値段も高かったせいかもしれませんが、でもあのを買ったことにはないんです。自分ごとにかく初めからこんなものでしか聴いたことがないんです。

柴田 はい、はい。昔はオーディオに凝った時代もあられたとか。今からみればおれれれオーディオ・マニアの先駆者ともいえる存在であるかもしれ

ない。しかし最近では、できあいの製品に安くてしつかりしたものもあるし、作曲活動に忙しく、また回路技術なども急速に進歩しているのです。ほとんどオーディオの現場に接することはないというが、昔とつたをええか、現代音楽にも大きく反映されているのであろうし、また現代音楽の演奏界の中には、聴くこの音について触れたいという人が多いのも非常にうなずける気がします。

柴田 はい、現代音楽とレコード音楽との結びつきについて質問してみたい。

柴田 最近の音楽や演奏会では、実際にマイクアンプを使って、ステレオから音を出して演奏することもあることですね。つまり電気音響を手段として

使っている。一方、レコード音楽も電気音響を伝達の手段としているということですが、どうでしょうか。この両者のむすびつきは、むしろレコード音楽の方が、作曲家の意図がより表現されているという一面を有しているのではないのでしょうか。

柴田 それは一概にはいえません。つまり最近の傾向としては演奏そのものを見るという要素がずいぶん多くなってきました。

柴田 視覚的というか、別にそれが見て美しいとか美しいとかいうのではなく、つまみぱれえすべらのようなもの、意図が透けて、そこに作曲家がいるという感じが透けて、そいつが武器なんかにい男であつてもいいわけですね。なんかそこが実際にやっていると、ミックスがその現場でコントロールしているとか、そういうことがかなり大きな要素になってきています。それと、もう一つ大きな現代音楽の要素としては演奏会にはいけないうことは、偶然性ですね。たとえば、回廊の上で音がリリクして流れてしまつて発振を起こし、ピストという音が出たりする。そのときの音はそうだったというので、それはそれはリアルティがあるわけですね。だから作品の完成度というところはあまり重きを置かない。

柴田 はい、ハミングが一つの要素とさえなっているわけですか。

柴田 え、そうですね。今までのベートーヴェンのような音楽などでは、レコードの



場合、普通の演奏以上に完成度の高さと、
いうものが要求されるわけですね。しか
し、そういうものとはおよそ対称的なと
ころに現在の作品は通い込まれているこ
とにもなります。ことに最近のものは電
気操作でいろいろ加工しますね。たとえ

ばエコーをつけたりしますが、そこには
ブッキングが起こることがあります。非常
にこれやそれというような、あふない橋を渡
ることがある。しかし、それが一
つの魅力のようなものにもなっている
ま、初めから譜もないことが多いで

すし……

——ということは、実況録音盤というよ
うなものが現代音楽のレコードに最もふ
さわしいものになりますか。

柴田 いいえ、それも必ずしも満足すべ
きものとはいえないですね。これは現在
のレコードというものの限界かもしれない
のですが、演奏時間に制約が出てしま
います。たとえばシネマチックハウゼン
のアンサンブルとか、実演の何枚かのレコ
ードが出ていますが、もともとは三時間四
時間もかかって演奏しているものです。
それを切っちゃって比較的いい所だけを
レコードにしています。ですから、これ
からはカセットなどで十時間な
ら十時間ぶつとおして録音されたものが
発売されるようにでもなればいいですね
それから、レコードというものに対して
て、作曲家というものは、私ばかりでな
く日本人も外国の人たちも、レコードで
発表するといふよりは、そこにいる人達
が、つまり聴衆と交流したいという気持
が強いんじゃないでしょうか。もちろん
演奏家にとっても聴衆との交流は大きい
ことですが、たとえばグレン・グールド
のような、天才というか、奇人というか
しりませんが、あいつは演奏家として表
れるように、演奏家というものは割合と一
枚のレコードをつくるということに情熱
をそそぎますね。その辺に作曲家と演奏
家との、レコードというものに対する何
か違ひみたいなものを感じますね。

柴田 この辺で、私がかつて日本フィル
の演奏で録音した氏の作品「シンフォ

ニヤ（コロムビア OS-105五八）
のレコードをかけてみることにした。
トリオの一連のセットで針をおろすと、
大変輝きのある音が再現された。

柴田 若林さんに録音していただいたん
でしたね。私はちょうど外国に行ってい
たので留守でした。あれは文京公会堂で
したか。録音されたのは、
ええ、一九六一年の八月でした。渡
辺雄雄指揮の日フィルで、分製する前の
日フィルの最も油の乗りきっていた頃で
した。この先生の「シンフォニア」の場
合には、楽譜もはっきりしていましたが、
ある程度テープ編集をしたと記憶してい
ますが、つまり編集がある程度可能な曲
ですね。

柴田 ええ、これは普通の曲で、拍子
のある音で書かれていますからね。しか
し現代の作品になると、楽器の入って
る所が自由であったり、縦断りがなっ
たりしますからね。
……この辺で、今さらがれてる4
チャンネル・システムについて質問を
ぶつけてみる。

柴田 レコードになり、そのステレオか
ラステレオから4チャンネルへ移る傾向
がみえていますね。

柴田 私は4チャンネルをあまりた
くは聴いていないんですけども、モノ
ラルと2チャンネルの差のとき、違い
はほとんどないような気がします。極
端にいえば、クラシックの音楽はどう
でもいいと思ってしまう。けれども最近の

柴田 先生御自身の作品の中で4チャ
ンネル向きの作品などはございませんか。
柴田 私はフルート八本の曲を林り子
さんがお弟子さんのために書いたのです
が、この曲などは、終りの所でフルート
が二人ステレオの所へ現れて、一人は文
化会館小ホールの一審奥へ行って、つ
つと二人は高い所へ、それからステ
レオの裏の方でもリコーダーでパロッド音
思をやるわけですね。そしてほかの者は
思い思いのことを吹いているのです。こ
んな作品はレコードにするときに4チャ
ンネルにもしなければ、めっちゃくちや
んねれにでもしないでしょう。音色の面でも
音楽のスタイルの上からも、違つて同
時に描きかける、吹きかけているわけ
ですから、湯浅謙一さんの「イコノ」なん
ていう曲も多重チャンネルですね。これ
なんかは上をアモの音が飛ぶような感じ
がする曲です。これはもう、4チャ
ンネルのステレオ・レコードにしなければ
味はなくなるのだと思いますよ。今ま
では、4チャンネル・レコードをい
ろんな会社で聴かせてもらったのですが、
残念ながら割合せまいリスニング・ル
ームでしか聴けないわけですね。しかし、
あれはやっぱり音庫とか博物館みたいな
所では再生してみたいですね。

柴田 それでは狭いリスニング・ル
ームで4チャンネルのための作品という
ものを考えますね。非常にこまやかな、
柴田 新内の三味線とか、すごくさうい
うものがある。非常にこまやかな、

柴田 自分でも聴きたかった。この「ヴェ
ルサイユ宮大廳の音楽」コロムビア O
S-107七のレコードをあちこち持ち
歩いて再生してみたいです。ガーガーと
派手な音がするし、各メンバーのリス
ニング・ルームの担当者が、このレコー
ドの番号を覚えてくれないとつたりして
……若林さん、これで現代曲の月評者
として及第しますか。

柴田 いや大変なとつたよ音がして
います。聴く耳とスピーカー・システムと
の距離が近すぎません、このシステム
は、このように広い空間で最大の効果
を発揮するようですね。お買いになっ
たのは、
柴田 ここにカタログがとつてあるの
ですが、45年3月に買ったものですが、
二年半になります。私はそのときに
使っていないです。
……次のグレン・アップは、その質
をされたが、やはり室は広いし、正
形に近いので、4チャンネルを附加
したなら、その利便性も、ただ現在は、
一つにまとめた気の利いたデコーダ
ーが見当たらないので、この暮あたり
を目標にされたらよいでしょうと申し
上げておく。

長いインタビューのあと、軽井沢でボ
ータルのモノ・カセットで録音されて
こられた音楽祭のテープなどを聴かせて
いただき、話は盡きなかったが、咽
をみて失礼させていただきます。
マンションの玄関を出ると、七階の通
路からは、都心とはいえず神宮の森が
拡がり、真夏の太陽が反対側のビル
の古くからのオアシスへの関心、
氏のがやから、多くの作品の中に、ま
た再生システムの中にもはつきりとよ
みとれるなどと考えつつ、私も帰路へ
と足を運んだ。